# 俳諧一串抄

乾

中村俊定文庫
文庫 18
827
1

爰にわがあへる友六平といへるもの好みて誹諧ふかく
むすびを好ミ世の中乃ことはさまやうし一生をよゆづり
ゆゑにたゞことやびをのはらむねをくだきて持てるこの士の
ひ人乃もとめもいとなびがたく一つの道を清むるなぐさを
はやばやとおさみなとて女のをもまたなる学業ばかりこそハ
俳諧乃為の志すべき事をまうしけるにもおほしく今いひ
出せる句どもハ一生道乃人にあらずとも赤ることぶるをが
おほきことゝいひておもふはこのうちぶみのゆゑにたま

俳諧のもとまれるひとつの格ありの彼方ぎたる
このゝ概ねもとぎりあんうまく正格をばえらぶ
るべきをばいひおこのれるもとの白どもをべて
きいろいとふ文をまろ乃方法のうるひ彩をみ文法
をる人を更ふをいとぶで心なまたびーうるいと
ふまでおもう法ーとをかーるを格ーるも然
ーとをとをーるまりの方ーるて体格正ーを逸
なるぶもハきをばまや今此方を彼方の白ーる



ひまをひまりてふまるる格の中をきまでのけ
ぢをこのるを城方あーるをひるひの方をを
白乃をををーーをさるを格をあのれ
ーとけるまをの法るをのの心乃をて方ーる法
逸をばるぶひ方格ぶ今此方をひきをんてをぶ
て俳諧の白法をを彩るまるのておもるを
るををきまへ方めぬい法やをいるをぶまて
をるをめをを正をぶ乃ををまをーるふらもるを

みちをしる斗柄のめぐるが如く体格とふみひらく乃串まてもろもろのすぢをつらぬきとほしへたるものやはあるべき実に一串抄と名つけられたるなるべしとこれが綱を撰し侍るもふみぐさのしげき筆に保とこのたまはりし年の志はす十五日まよせるの秋上野なる不忍の池のほとり

草の庵のあるじ
さんまん



俳諧一串抄目録

○名ハ體用兼たる事 初丁
○俳諧の発句ハ体格ある事 二丁左
○発句の格ハ類縁よりて定べき事 三丁右
○古今集の俳諧歌ハ和歌の発句の流ハならざる事 六丁右
○曽呂利新左衛門が滑稽の事 十丁右
○発句を作る心得の事 十四丁右
○和の発句俳諧の字義より出る事 十八丁左

○正當無名の事　十七丁左
○第物ふ序あるる事　廿八丁右
○第俳諧の中興ふる事　三十六丁左
○第ゞ成人の事　三十八丁左
○發句ふる必要ある者を用べき事　四十丁左
○切字の事　四十一丁左
○二段切三段切の事　四十九丁右
○たなれといふ事　五十四丁右
○連句俳句差別の事　五十八丁左



○隠士之句を解く事　六十丁右
○發句の魂と以ふ事　六十二丁右
○学ハ法ふよるへき事　六十六丁右
○類語の部　六十八丁右
○境界の部　八十六丁右
○獨書の部　九十丁左
○名所の部　百八丁左
○体格ふ隠れ事　百廿二丁左
○響を用ゆる句の事　百廿六丁右

# 俳諧一串抄

六平齋亦夢著

○名ハ體用の元なる事

それ〳〵物の名ハ。其実を表せる物ゆゑ。実を正ふせバ体なり。故に名実一致なり。名体不二なりけり。然しかく其体ハ用ゆるが為なり。西瓜を名と体と用とこの三のハ。相ひなく離るゝ事なし。たとへバ筆は毛と管と合して。なるハ体なり。名を文字なり。物をかくハその用なるがごとし。その用を変ぜバ。つまでも物をかくが筆は道なり。道を誠

あり。誠なれば天地(あめつち)に共ふ人〳〵。されば世こゝろ行〳〵名ハ
元なり。故ふ孔夫子も名を正せんと乃給ひ。俗ふ所よ
ろづの物。名あり〳〵俳あるものあり。名のごとく俳
なるものあり。琴棋書画のゆきハ。ふみとり見ふんゆる
俳あり。詩歌連俳のゆきハ。名はなみ〳〵俳なり〳〵。これ
らの類ハ名の即ふ俳ふ〳〵其用を為ふ。されば琴棋
書画のゆきハ。其用を為〳〵俳ふをもてある故。名用
を先ふ事なり。詩歌連俳のゆきハ。ふみ見べき俳なり。
用ハ名ふを俳〳〵。人の心うゝ裏をるふのなれば。名用



をこうふを雖〳〵。やゝもせれば名を離れて。邪ふなりゆく
りの少かゝ〳〵。学者ふ心ふ〳〵なり。さて詩歌連
俳の用。名ふをもまり〳〵をいとんふ。詩ハ異國の業な
れば名ぞ〳〵なり。まづ歌の名を易くいぞ。歌とハ
訴るの義なり。人〳〵喜怒哀楽なるふ胸つゝ人の鬱
懐を訴へ出し〳〵。心をはが〳〵なり〳〵むられ歌の用。
飛鳥井の中将の「たりひさや我家後」歌の正徹が
「中〳〵ふなれ魂なり〳〵」とよめる類なり。られ〳〵ゝみ
人の鬱懐をうれ〳〵出せるなり。連歌も所也一体

まゝ。法ゝぬるゞ名なり。安永の貞任ゞ衣川の附句。
牧朔公の鞠子川の附句の類なり。うゝこゝふるの義
風ふりのふ狂ゝこゝ多一なり。拙しゝ其用を裏ゞる

○俳諧句ふ体格ある事

詩歌連俳おの〳〵格あり。体ふつゝたる格なゝば是
を体格といふ。格とハ物のこゝ有りの事なり。筆ゝ
ろぐゝぬ為ふ重く意を。筆格と名附るあてを和
歌〳〵。歌の格ハ物代一筋ふ云ひ喩を。連歌の数句も
一筋ふ云ひ下ゞ事歌ふおなゞ。ひとり俳諧の格を。



世物を以ゝ彼物を云ひ喩を事。たとゝ老人ふ物の
裏を見せゝ。其表をさゝゝゝむる仕方なり。うゝ
連歌の格とハ大ふ別それ。世体格を定めあんとせば

○俳句の格ハ頭詠ゝ宜むべき事

詩歌連俳の学者。花の〳〵梅とう梅とこの。雪雲をま
うけゝ。初ものゝゝ試むべきなり。花を雪詠といふ。
形の如く蕊ゝ頭詠ゝ習熟〳〵是ぶれば。喜怒
哀楽の事あるふ際ゝ。詠ゝ許るゝも自己流乃
体格ゐ表。世のゝゝ人ゝの云ふ為ゞる事なゝ。

おの道もまゝ古典古実のゆゑ物語ふるをよむ
ふ於てを古人の云ふ所をぶる事なゝされば
辭の類多さがうち欲る其こゝ俳の第一ゆゑ
發句の道といふまれ。連歌ハ中世ふ興を。格ハ欲
ふ化なゝ。其發句ハ七文字七文字。（けだし七文字俳諧の無くべきこゝろ）
そのゆゑも優ふ和。されど夏物紙云ひらゝん
とまるふ除ゝ。僅ふ十七文字なれど何とゝ和
狂く笑ひ。これ古刹のゝ用ひゝ字音を用ひざるが
友なり。寔ふ　皇國のさゐ字音を用ふるもやゝ



古ゝ人皆平安られふ別道だ。古刹雅言ハ都ゝ今
文の稚ふ石ひ。且元庸の番ハ淘ゝり意くゝゝどこの
しき業ふ化りひ。竟ふ字音を用ゐる俳諧ハ無れ
るなゝん。其元祖ハ松永貞徳貞室なり。よゝり
芭蕉桃青といふ人ありゝ。を道ふ出し。竟ふ俳
諧中興の名を以ゝり。これを翁と称し。近ゝ世ハ
神号をゝ崇るとゝ。化りふを中興ゝるも。自
を俳るの考拙ハ初ゝ。必ゝ化ゝいの体格ふ出し
ゝるが友なゝん。流るふ翁没しゝのち。を流道紙

くむの門人。世ふ十哲と称する者。おの〳〵名誉なりしるゞいうふぞやく人。忘れりてのゆく〳〵かたりつたへく。おの〳〵ゞ好くする変の風調のこゝを見と。そもそも〳〵ふ門をこゝて。五ふ正風俳諧と名ずる。その十哲乃内なる。麦根の辞六ゝ著せる俳諧風信文選ふ四ふいたく。

直指伝守武宗鑑より以来。奥をとるゆの徒俳諧と名ばく。実ゆる事ハ昔〳〵ゝ〳〵先師たゞめく〳〵新怪奇之の魂をゝんぬき。正風



遠玄の実をゆく。道のゞの本撞ハるにくそれくるゝよう。あく〳〵聖猿蓑ふ和りて。正風新をたく〳〵うふあくたせう。遠時りてたゆ人の俳諧ハ。金〳〵先師の流ふあく〳〵。書るハ他を好くく〳〵おの〳〵ゞ一風をくたう。程氏日の風新ハ。ゝいの名をゆく〳〵る。酒ゝも縁とも名ばけく〳〵ん。何のたゞくうあく〳〵ん。化乃たゝのいの事ハいたゞ。其角文考ハ下ゝて。ハあく〳〵。先師のに俳ハよく去似けるゞ。たゝ世紙

の流よりあらびたる。

新しふ洗六の俳句ばかりふ。正う不正う。これもまた
そを変とたらびぺ。今は世十方の俳士。同郷陳里は同
みを。互ふ事ひとしうるも亦形の如きを。去迚
其土其所の風習ふ別ぺ。古の迚れを正風なりと
ふ。化の風をたらびぺるを。別来つるふのまよ必
ずくさうをとなれど。おのの化の公ふ詩歌連通せ等
さうをいうびせん。こ迚化なり。前のそいうふ於て。
ぎうふい一定(たいぎ)拒ある事ふ公ばうびるれ殺化和歌なり



ふれいまぐ世道ふ狂ずといふども。おだうしくなふ
変を述む。さ紀まそいふおとく。のうの事を紀を
ハ。ぺ其方を正うもるふたくハなり。俳諧の名。

○古今集の俳諧歌ハ前の俳句の祖よハ

なうさうる事

の為こしまてハ史紀の滑稽(こつけい)傳ふ出ぺ。滑稽(こつけい)れい
ぺれハ古人
ぺ汗をるれど古ひ迚られど凡のうれふ中したがつるもあり
且日ど言りし物ふ事蒙をのを凡ざる者の為ものれハかぺ云を形ふれ
滑稽ハ俳諧也と注し。

皇国(こくわ)まてハ古今和歌集

ふ始りぺ古ふの紀ぞ迚り。祝るふその歌のをぺ。

史記に於て俳諧と出るの類とたぐひなり。近世氏
名ひあるの歌の姿を執て。俳句を作るの作法とする
者多くなりぬ。蕉翁の史記の滑稽に准じて作
るも俳句とたぐひあれば。今まづ史記と古今集
の名ゑるけぢめをとりて論じ。

史記滑稽傳 索隱曰滑謂亂也 稽同也云云

威王八年。楚大發兵加齊。齊王使淳于髡
之趙請救兵。齎金百斤。車馬十匹。淳于髡
仰天大笑。冠纓索絶。王曰先生少之乎。髡



曰何敢王曰笑豈有說乎。髡曰今者臣從
東方來。見道傍有穰田者。操一豚蹄酒一
盂而祝曰。甌窶滿篝汙邪滿車。五穀番熟
穰穰滿家。臣見其所持者狹而所欲者奢。
故笑之。於是齊威王乃益齎黃金千鎰。白
璧十双。車馬十駟。髡辭而行。至趙。趙與之
精兵十萬。革車千乘。楚聞之夜引兵而去

けいこつをもの滑稽とし。淳于髡などの行ふ変の
さまを名づけ。いふまり。上来史記の文を齊乃

威王の時。楚の王より大軍を發して。齊の王を伐んとする夜。齊王淳國なる趙の王に。救を乞の軍勢を借んとせ。淳于髡をして。黄金百斤と車馬四十乗を贈る者物として。淳于髡ふたせ給ひきれた。髡これをうけ。ものいはず。只涙をむせび大ふ笑ひ給ふ。齊王その子細を問給ふ。その者ハ申さ。髡。突梯として。いふ。我今東の方より来る。しふのうへに農人ゆく。田の宮祭を祈る



其祈る和の供物ハ。豆づゝふ半のひづめ一ツ酒一徳利ふ。さて祈を求るれの穀物ハ萬倍十倍あり。それがをかしくて今も笑てといふ。齊王これをさとり。ヤがて求むるれの救ひの勢ハ大さ。しかるに和の者物の多くなれをさとり。者物を十倍とくく趙に祈しかられたゆひのまに軍勢を借り来れり。楚のいくさ。ごとこれをきく。秋のうもふ引去りるとこそ。これ滑稽人の。功ひハ武陵桃とく。泄あんだ。ばかりなるこれ。俗諺也。

菓物のもくなる事を更ずもいとびこうくをつ
うぬ農人の供物の少きを云ひこうく齋主をして
其実を合点さする仕方なり。拙るを清捕朔臣。
古今集さかうい欲の陸ふ。

清捕朔臣奥儀抄

俳諧の字ハ見ざるこうくよりむなり。これよりく
こうふ人俳ふ戯云とれりくと。哭しも拙らもそ。
案ずるに滑稽の字ハ道ふあらびて志うを
道をなをなり。又俳諧ハ非王道しく志うを



述妙義こうる欲なり。故ふられを滑稽。毎
に利にあるものく如言語。尖をもふふいひ人
なり。或ハ狂云すこく妙義をゆくそん。世中
人ふこうふ何ふのくそれこうべ。
又契沖あざりけ古今集餘材抄ふ
誹ハ俳の字を。なるくこうなる菓書の抄れた。
誹となれるなる爲。俳ハ玉篇ふ云ふ皮皆
切雜戯なり。諧笑類俳偈日本紀ふ俳優をを
ざをこうなり。諧ハ玉篇ふ云ふ胡皆切和也。合也。

調也。倡也。或ハ切ふ周こ。徒歩ノ切和合也。天帝ノ
切遷也。淳于髡優旃と云人等ノ。戯云ふこと
よせて。時のたとへとなれる類なる歟〜。
こゝに清警の大体なり。清警ハ王道なあ
らぶれども。妙義を述べ。時ふ用ひ。
上来二大人のことを。あ〜といへども。たゞ
ふ世のぞる和ひ。帝王をうふ打ふふ清警俳諧
の義ハ。俳と笑侍をなをもりの。諧と大道平ふさ
和合るゞ行要〜。淳于髡優旃等ノ人を。皇國人な



○曹呂利新左衛門ノ清警の事

こゝ爲いたゞ。大閤秀吉公の臣曹呂利新左衛門
是なり。ゆるゝ死大閤擬ふせんと作出されゝ。擬行
とゝ近習の侍ふゞうを具〜〜。和ふ出〜拉ひ給
ゝんゝの事なり。されど数万人を率ひ給ふ。
大閤も大閤ゝれ。微ふハ危ゝゝゆゝれど。必諫め奉
るべきに。たゞそれゝゝるふや。法ふたゝる畏を居ゝる
ふ。新左衛門ふ所業ふあり〜。例の法ゝ〜と云ひ出ん。
ゝれを死法殺るふ。ゆゑ死ゝゝふ。蔑て沒及ひ〜

見越入道ふあくりの道ゝをれを一口ふ呑んとも。
わ道いたく世界をこのとふ行きすべきハ向悔く。
おう〳〵其許ふ変化自在の術ありとく。新くハ
ヒが一朝のあぐさめふを大姿を梅干ふ変じ
くんを拾く。それを見くのちゝ〳〵世界を始さ
せんといひけ道だ。かのの道ゝちまち梅干と変じ。
ヒが赤くゝゝび来るゝられをまれひゝゝ
ゝゝ。ゝだ〳〵厨む其似〳〵。新ゝ口〳〵ぼり
あみ屋ゝひゝゝ帰ゝゝゝ行れだ。御前ゝふ



大笑ひとなり。其のち微行の歩沙法ハ止ゝゝる
とゝ。ゝれいたゝる道咲言合大道りのなり。俳
諧ハ正風ゝ世話なるべきなり。拙るふを義を
なゝさいふの欲を裏義抄ふ非王道して去ゝも
述物義ゝる欲なりとの給ふハいふをゝ。なを
ゝゝふをふゝふ。

梅の花ふんふゝを来つれ誉乃
ひゝゝ〳〵といゝひしもゝる
山吹の花色あゝもぬしやゝれ

やうくどもうちもらして
いくばくの田植僧達だうをとくきん
おとその田長を教るくようぶ
川しをほうくをををるわげて
天の川原のなりふやうろうん
むつかしもほぐつ紀なくにはぬめり
いづくハ秋の長〳〵ちふ教ち
古今集ハ十八首ハ俳諧歌ちゃる世姿うん。をと
ぞハひらめふしうく。俳一字ハ義ハあれども。五道く



引合せる諧の義ちを史ふんてび史紀ふいちゆる妙
義ハ。俳諧二字ハ義の物ふるうくの事なり。諧
ハ物二ッ和合せる義うく。俳の字ひ言を以て。諧
と大道ふ引合ひるを。俳諧と名付る事ハなり。
世俗の歌ハ。物ハ一筋ふ云ひ〳〵るハうく。
二ッを引合せ。妙義ちをるるゆ事。そハ志ひ〳〵
ふうく。俳諧ハ彼の事を云ひ喩さんが為ふ。ものび
世を云ひ出ハ歌ちれたり。〳〵稚くいひたり。世を以て
彼を喩ちの義ちり。蕉翁が諧ちのうちう世義

なり。又奥義抄に火をもゑにいひなんとあるをぞ。似たる事なれ共ハあらねど。的當（てきたう）の境にいたらば。そのかく上乗の歌にも義もなし。的しいなど俳諧ハ火のあつきを治く。氷ハ冷なるを喩ゆ乃義といふ属きさなり。いづれにも古今集にいへる歌の姿ハ。俳諧の發句を作る滑稽ハ取ざる所のなり。されバ往古（そのかみ）世話狂言。これらハ歌と記されしハ。只大せつに古のけ続ぐるならん。又ハ後の世の人なりく。正歌と雜歌のけぢめを知らしめん為



なりけれど。さらぬき猥雑なれども予そのかみ都に遊び。朋友と二人木屋町に住しが。此町に西へよりて書生など集りて。おのがひし物学びするうち。予が隣なる舎りに住む人ある。秋催馬楽（さいばら）をうたふ。所から殊に志げかる秋なれバいとあはれにてきこえし。其後とめてかの人など宅へいらい述し申て。よべの事うれしミのべさて今一曲此所まで物し給へと請ひければ。程なくうたひぬる。初春の桜人。次ハむしろ田なるに。あなたふとの志年

及ぶ比。只一変俗語の交りを思ひ。かぼそき朋友と臭気合られたゞたちまち飛ひや炎く。
おハ世程学びうけ。ゝるあゝいまゞ熟せびとゝく。
恥ら〳〵謝し帰られ〳〵れた中変れめ
で〳〵変えゝる事〳〵。彼一変交り〳〵友。中
変ハいよ〳〵学ふかりゝ。此集ハ此紀意あふ
も。欲の正雅をゆゝしゝ為ゝ。如義理
述んとの分ハゆゝぶ所多〳〵。史紀乃文
よりゝまでハ。古今集ある俳諧欲ゝ。俳の義



のゝあ〳〵。俳諧の義句を俗語ハ取ゝ
きをいふのゝ。さて人ハ古ゝいを教ゝふ。俳ゝ
雅義ゝ。諧ハ合ゝ和ゝとのゝ喩しゝ。初ゝ
事ゝ〳〵と思ひ〳〵ゝや。先紫俳諧ゝ平和俗
談。或ハ平話俗談を礼を拘ゝ教へ〳〵ゝ。

○俳句を俗語の事

拙述ゝも斯のゝ示ゝゝ。やゝゝ一筋ハ俳一字
の句とゝ。滑稽ゝの引ひ。まゝ俗諧字
義ハかけゝ。句ゝ句のゝ導んとゝ。

うゐハ平話信侯於此とする義なりと示せるごとく
なり。此こゝ何のくも詠物なり。平話信侯とハ鄙
俗なり。此こゝ世なのハもち屠呂利うゐたんと世義
微行の疎めなり。平話信侯とハ九歳入なり。
牧　豊國ふたゝうゐの字義をなつうひ来る例歌
いたゞ。源氏末摘の巻か。姫君の御容貌を。源氏
の君かゝり給ふ御こゝろとだに。
その鼻ハ蕚賢義の御家物
季吟が注ふ。此ところ俳諧なりとなり。又伊勢



物語八月橋の段ま。
たるゝきめる猿をゝどなりふとよめるう
ゑれば。みるゝ人うを迷ひのうゝふ。涙おとしてなり
ひふろう。
とある注ふ。此こゝ俳諧なりとなり。ほゞびるとハ
俗ふいふ。ゆゞやけるといふ事なるゝ。鼠の上へ鼠や
るるおゞ涙が落るといふ事なるゝ。古傷の別也
この涙ゝ紙初ゝ世ゝ。ゝ蕚賢義の御家
物ハ象なり。拭れゝ象鼻といふ事なり。ゝゝゝ

物事を書ふいたせ[illegible]。扨の物りく[illegible]
[illegible]。注者も俳諧とハいつて。雪吟を小村氏
[illegible]なりし。箱の師匠[illegible]。さて鄙俗とハ猥の上の
のゆふいあしび。凡そ人[illegible]年用る。戸障子
食器衣服等ハ雑具。上品下品を混じていふ。

○箱の俗句俳諧の字義より出る事

今箱ゲ殻句をゆびく。洒をりて彼ゆ引合せる
具合を示さんか。

四ツ入器の拵りぬ也えんう



四ツ入器ハ平常ハ雑物入て彼ありも也えんハ洒なり
句意ハ洒の也ゆる人のひまちくなると彼の四ツ入器の
大小そろはさるりて喻せりまた古人の詩歌或ハ故事
を彼ゆりて喻せるハ

[illegible]年前を空く称うる

芭蕉杜甫ら詩ハ愁聞今夜雨只是滴芭蕉とある歌
彼ゆりて茅庵の俗しきを喻くるに句よりして洒
門の庵を芭蕉庵と呼しとハ朶老ゆかりしさもあるべん
句意ハ杜氏ハ芭蕉葉の面をきく家ハ習ゆの風ゆ芳

屋を吹荒され漏湿の嘲ふ面を少よく嘆くべし

なるべし　彼を云て白と似るた意近ゆり君所の白ま

早稲の香や分入右手の水流

芭蕉春秋經ふ豊年と有年と記せるを彼くし年乃字

即稲なれを早稲りく有字を呼記せるを芭も意記ま

似られを境界紀八十七丁ふ〳〵赤ダ右くみをとり長さを似れるを

照らしくを知るべしまく彼世のゆうひふ二格ゆりて

主義ハ一なるゆ今柳の白の陽り九白をゆけく示ス

八九間立て面ふる　柳　の邪



柳ハ立面ハ家なり。白ハ柳のぶくさぐり

くる客態ハ。立てくる面ハ陰移ると喻せふ

なり。面の陰る紙ふ見ゆる柳くると似るぐを。

面陰く打切くがをふいなり。武打切く

なくを突放ともいふ。哉の歎字ハ柳の字ハ

引よくゆべき格なり。面のふる格ふ見ゆる

ナア柳いのくろなり。実に初むくる者の白ま

べき事ゆり。欲詩ふかくくびりくの文章。

或ハ面孟京なもいまぐを実境を見新ぐる

人の名ふ似るものあり。洛白もいはゞ柳を植ゑぬ人が。柳はいうるる物ぞと問る事若く柳を植ふるのハ。たとへバ八九間も高ふ成ふる間の陰ふ成ふる物ぞと喩しふる義と知べし。柳も霸王樹も不二の山も象潟も同様なる。義を実境をとゝ知るる人ふ對しなくハ。面も殺白も嘲も笑ひ成ふりぬ。ゆゑ文辞ハ実境を知らぬ人ふ對して

○正書無宿の事

初て働くものと知べし。古歌ふ正書、変文字なと



いふ事あり。正書とハ古へむかしの事をたとへ宿と宿と主人と相向ひて物語する時ハ。終日かゝるもはと耳とこそ語る後しハ海山夜。第一本用ぜしく埒ふ成あくといふるゆへ。今柳の陰ハ家深ふ正書し。正しく見語る人ハ。自身ハ実境を語ふ成後ハ海ゆ魚。白を用ひ似るふ及ばゞ。それを正書ハ文字なり。正書ふ不宿あるといふ。柳ハ文辞乃用ハいまゞ実境を知らぬ人のふあ。或ハ後の世ま

生るゝ人〳〵今れ事を云ひ送る為なる事必
せり色をりてゝゝふ百里百年の末〳〵柳象源
ふ踏〳〵ぞ。りゝ〳〵得失の道理を。文辞千載て
やる類なり。文者道を輿ともいふとぞ。其載ゝて
あゝりゝ〳〵文辞ふ体格あり。欲ゝ〳〵手示を波
が遠へて百里百年れ末ハ扱ゝ。藻の人〳〵も今き
く人〳〵を文ふ無ぬ事とゝるなれだ。〳〵
体格ふ学ひきゝるゝ。自然似るべきなり。体
格ふ似なゝ〳〵千里の外万年の後の人〳〵も。因



序〳〵ゝ作り喩ふも因縁ゝ。神代のむ〳〵
の歌。或ハ孔子釈迦の經論も。今日因ふ以ゝる
ハ。格の正〳〵きゝ為なり。
ゝれ物ゝゝゝる柳の高ひゝ
傘ゝ部〳〵ゝけゝゝる柳ふ
うゝひゝを縄ふ賦ゝの婚柳
ゝちゝゝゝ面〳〵ゝゝゝ柳髪
乗の初ゝ〳〵る柳〳〵の部
初二句ハ柳の乗なる色を喩し〳〵ふゝ。

種物傘等れ俗物示しあんだい部とこ家中の
ようく。人情をよく。能く合点出来るなり。
次なる柳は眠の人を。これ美人ふ眠りの貴
あるを白をせ。みや部なる美紙魂なかく。
たをやぎを喩しく。四句めハ髪一編の人を
なり。未れ句ハ屋眠るを者をこ行だせく。柳の
枝の潤力なるを喩しく。上来六句ハ柳を主
の格。今一格を幸物が主なり。残る三句見く。
支物を六季節なるを物をとらふ。剃とふ人の上の俗言を
怒哀楽等。物とハ不二の



ふを和歌の浦も中若も絵ぎ力も季節なるを物が主とか
雲のよくも色食もみを物をり
れで。季節の柳ハ家と方なるく。彼此相反をたる
ういみ於くく子万句あるも。此二格の外ふ出る事
あり。式二句ハ其者なるを支ふて端書この主と
知べし。

猿雖ふ對し

そろくのこ行柳ふ任せべし

杜國を送る

笠の法年柳縮る旅出なる

## 揚柳観音の賛

柳の我うしろむきそぶ佛うな

初句下知の辞あれど。猿蓑ハ門人と知るべし。
揚書ふ對をとゆるゑ。ゆゑハ。世の交ひたるくだ
蓋思ひくしくまづ欠け。舌柔うふしくく永くなん
をゑど。ゆゑつつ。柳を信くいまゝ知るべし。
次の句ハ万葉の歌ふ。柳の糸れやたゝうゑをゑふ
男れ方の結ふせんなどゆ迷ど。信く別迷の辞
とゑくる爲し。佛の句ハ。ゆ迷ふ對したる去



素瓜の句と同様裁なれど。其和ふ爲ゑべし。
此之句も彼此和合しく俳諧宮義の和ゑけ迷
だ。ふ万句も此搭もて一串ふ法くぬべき事ふ
しくく知べし。斯く搭をさぶめく俳ゑる句ゑ。
伊勢ど云ひ辞ゑ。いう結ふ云ひ海ゑくゑ縁ら
しき体裁も。句ゑ言ゑふやゑふ云ひ方ゑ。
ゆゑくん。その云ひ辞き云ひまくくゑゑる。
若狭しき海の辺迷ど。人その姿体裁を受俳ひ
世ふ弘まるもあくん。芭を流行といふゑ。されバ

いうわど面白く珍しく少ゆるも。若格年寄
るハ俳諧とハ名づけうゝ。たゞ世の風俗
ハ羽織のゝけの也くなり。緩くなるハ。即流行ゝ。
流行有ゝ。こゝ世の中ハ活潑れ。流行多くバ世も
栄ゆたふれ。さられいうハ流行なればとて。羽
織を常ハ下ハ長くなるバ。羽織の名義を考ふ
とゝく。俳諧も流行の時ハ。名義の尚雅を
ふゝ考ふ。雅ゝ有ゝ。老角ゝいうの体格ゝ。
八九間ゝで面ふると云ひ捨ゝ。聴ゝ人ゝ。

おのづゝゝ柳の姿を合点する格ハ作るべ
なり。俳ゝ打ハふ。ゝいハ芭を打ゝ蛇ゝ
響ゝを手波なり。庭上ハ蛇のゝ動ゝを踊ひ。
ゝれを面ゝふ。格ゝ動ゝ作ゝ動ゝ作ゝ
蛇をゝ面ゝおのづゝ面ゝむべし。若ゝ蛇ハ
蛇を打ゝ。蛇ハ彼ゝ面ゝ事ゝ。格を
探れゝ。ゝれ。ゝれハ。ゝ面ゝ面ゝ
ゝが上策なり。かの大間撥行の作ゝ
若加茂行相ゝ。ゝ中ゝ人ゝ。庭ハ。ゝ。

ちかう孫云中をくぶ。君の御人ゐ移く右云とい
きたるしるべとも。さすがの人情なれだ。そ嬬の程
程ハ句論。後の手沙汰もいうぐうのくんを。首尾利ぐ
俳諧ようくのちくをすりふ御宮を遊しハ。実ちく
功といふべし。箱ゥ数句も沈和平妙を好る数
のれたるも。

蓋見れば首筋赤紀ゆるるる
たりぬきれ猫も知べしを軒の秋
初雪や乎伝の紫のたちむかど



初句ハ表ハ蓋と首と紙迷ゥ。聴く人をしく
あちくなりハ疾と尻と紙合点さもるなり。
中の句ハ法貴油立の動きやもきをあぶて人
をしてのちくありハ彼同ゥ人さやうたんをぬとはし秋
風を初しせくり。風紙表ハ云ぬ。ぬ云いあり。
後の句ハ筆れたの見けくかようたき物をたと
ましせく。初雪れけしき半妙くるを論
くり。就中法貴の猫探ゆもしく妙くたくい
ハかるのやしき平俗俗侠の具紙むもと考る

ふ涙さんあり。いふあとなれば元文辞の乃そを
事をまく云ひ達くるこの肝要なり。られを詰
元波しといふ。一波ヲなる事ハ何を泊くを
云ひとる蔵られど。古書ものいつるかく。書ハ言ハ
おそらく言ハ不尽意とあるく。ゆる宗味涼也のゆ
ありく。ひりく云ひ解く事。独つど。辞の文ヲ
ようすべき古人場ハ涼ぐハ。腕物法費の物等乃
曲りの波用ひく。人をく。蛇ハ古造物を合点
さもるハ古くハ古〜。られ蕉翁が古言ヲて人



情ハ古ていさ故事。ゆるもひハ乃を等を用ひば。只
耳をき平物ハ用ゆ。平物を廣ふ〜く加ゆ
可笑こゆり。故ハ四ッ大器とも。盥とも器とも風
とも喧嘩とも孤の利しゆさとも。又物乃貴
後をとうも示ふハ。金とも銀とも銭とも
券とも。大坂とも浪花とも難波とも法ふ。大
坂といくを独く人の云。商人ハ利のひよう。沼ゆと
いくを侍人ぞと察し。ゆふをとくを物ようみ
なんと知ゆく。古やく坊が吟くなり。変物ゆ

とりの上すくいたぐ。欲するくハ酒のむ〜ろ欲
のむ〜ろあど。むゝろとはいふ。俳諧するく
ハ墨とも毎りとりとも清くりともおもゝ
ども。筆とも拭板とも毛穎とも書とぬも琉
球とも備後とも呉ち清〜とも。を能産所りさの
けく方位までもおりとを季節も墨ぬがれ
ぬくのもとなる俗語もて。を場を人柄ハいふる
及ばぬ。いうなる微言とも形容〜喩〜しく。
言の遠のざるハあ〜。欲するとも喩さぬハゆゝ



ねど僅か十七言の建立なれど。俗語の此をもて
反覆〜く彼を喩を例ハ考るの社なり。
かるさがなのき建立ハ。かゝ質朴の代ハ決して
なきのなれど。枝を温る君子の識見さるの
なれど。上ともいひ〜如く時代の物〜しむ不
るく。数者ハ釈迦の弟子達摩。孔子孟浸ま荘
子ゆるく。れのひなをもさるのもんの。
さて毛穎ハ上ぶ。墨ハ中ぶ。清くハ下ぶとされて。
○万物ハ序ゆる事

人の心を分ぬるハ所ゝの物ゝに序を俳諧
の句に詠物の物ゝに序ハ物の名を書き
動もすれば新ふ人あり。物ゝに序といふ宮ゝ
なゝび文辞のよせゝ情ハ遠ク新きあり。抑
萬物の序ゝゝやハ人まちゝゝの心にて製を
るふゝあゝび。元萬物に合ゝ持ゝる情なり。
情ハ古今ゝ其物の位ゝ。いゝゝ。ゝゝを
詩歌ゝも古人作ゝ。法ゝ古物の序とゝ成
ゝるなり。物なゝび書ゝやゝ咲ゝ薫り言ゝ。



色ハ赤ゝ序ゝ。郭公ハ鳴ゝゝゝ。
ゝゝ花ゝ咲ゝ。麻の葉ハ麻ゝ。ふもはの
なゝも。時雨ゝ降ゝ。
も古人ゝ如ゝ。又ゝ物ゝ其物の名を
句に作ゝ。董ハ位ゝ。松ゝ待ゝ
ゝ。胡蝶ゝ舞ゝ。
ゝ物の形ゝ。ゝ色ゝ。字義ゝ。功能
ゝ。ゝ欲ゝ。ゝ。物語ゝ。
ゝ。人の耳ゝ。ゝ。

ゑるまでぐ。みな序すべく事物を形容せふ
の用なり。これらを世上の人のみるもしらせおく事。
さて俳諧もその物を事を全くいそぶたづ
傍(うらう)をはまみのげく。其響を以てこれ人の心を
さそふ。故かたいうれを和歌の葛屑(くんくず)といふ。世のん
あくぶの種こふ部をく味ゆるが友なり。

郭公なくやみ月のゆやめ卅
世の中はさふふ宗祇のやどり
道ぢくの本種はこふ食迷うり



初白はかぶ欲ゝ郭公なくやさ月はあやめ卅
ゆやめもちぬ高をするのぢ。このうさこの
白まぐ。ゆやめもちぬといちん料の序なり。
かんかくぶのもそれりのなり。今そのもそれ物
を拾ひのげくり。白はこのものごさ月のもく
ぶん書柴のくちよりいまに帰やる事。
もくくと前くれる花をかくを。月のゆやめ
ふもをもくぐが如くといふる種りて形容ちう。
次は淵筌の語なり。世合は時白のやどりある

るゆへ。ゆるゆるぬく世の人のこゝろをもおもひ。さてやう
ゝ家柢のやどりハ人皆のやどりと覚ごゝろ。
旅りの白ハ撞也一日のちかなきゆへ古今の人
此詩歌ふ所ゝ也。道ゝこの木撞ハ冬ゝ
さへ〳〵それゝゝと云ひ捨く独く人ゝ〳〵扱も
ゝ〳〵のゝと思ゝ也ゝ。さく涙物ゝ合あ
ゝる序の働ゝ。

高野山すゝく
父母の恋ゝに袁〳〵ゝ〳〵ゝ法華



乾坤が判髪を
初年ゝ孤のそゝ〳〵ゝ天窓ゝ
桃隣が新宅
ゝゝゝぬ霧やおゝんの花ゝ客
當麻ゝゝ〳〵
俗ゝゝ〳〵ゝ殺死ゝ〳〵ゝ法の私
拝女乃賢
枝ぶりの日ゝ〳〵かゝる芙蓉ゝ
不二門の拝ゝ〳〵ゝ

猿をきく人捨子ゝ秋の風いかゝ

南都まゐり

菊の香や奈良ゝゝ古き佛達

元禄和尚ゝ通を落り過る

月さゝく森入ゝ鳴る鹿の耶

ゝ枯ゝの句。雑子ゝ思ふの序あり。孤ゝだゝを序あり。牡丹ゝ富貴の序ゆり。軽ゝ手たゝの句。芙蓉ゝ艶なる序あり。猿の寿ゝ断腸の序ゆり。菊ゝ長生の序ゆり。

略ゝ宗通の序ゆり。此序菊ゝ世の人の公平なり。故ゝ宮殿ゝ小墓所なる事を見ゝ右ゝ教戒をなゝる云も。桃源が新宅のゆゝなるも。南麻呂のかゝさび云者を思ふ媒となるも。拙女の人ゝ媚る情態も。南都の古ゝなるも。元禄和尚の通を落り枯ぬ歎きを。みな其事と少云ゝぬるゝ。それゝの序は依ゝ情紙ゝ云ゝ友なり。今各位を替ゝ。南麻呂の鮒魚を菊とし。不二門の猿を略

とせバ。強く人いうぞう俳者の云ふ通せんや。されど欲連句ハ席上ふ。古人の俳例ハ書をあまく積おくを。世席を以ふせんゞ為なり。さく又名ふ俳く俳る句とハ。

あくるゆれ苔めされく茅葉ふ
なふを津や田螺の姿も色蕉
接ものふ梨の法ぎ積や山屋敷
節季ゆゞ来くハ風雅も師先ふ

初句ハ茅葉ハ句なり。苔の名ハ様ぐをくを。



様ハ呉服屋かぶ。茅屋かぶ苔の様なり。ゆ通らのかぶを買入るくふ宵ゆくく接ふとなり。次を雑波の名ハ茅ふみもいをぬふうける冬蕉の句なり。三句めハ接梨の句なり。ハ接ふうけくり。接ものとハ山屋敷のよび中くくく。山屋敷の句ハあくゞ。終りハ節季いの句なり。師先の名を仕舞の法ふをくり。を辞の秀句ハ接らりきりのあり。大体ハ茅接乃手ふ色波くくを宝まるなり。されハ一物入のぞ

その白とさだめがたし。他者の行ひなれる
をもてうきすぎなり。影ふむるるため
うくるもあとなん。形ようくるハ
瓜の皮むひくさ所ごゞ蓮瓶壁
蒔れ蓋かくるる法ぞ紀ハ
初白ハ所の白ようく。二白をこゝろ白なり。
色ふるくるハ。
紫陽花や帷子ぞ紀の子淺黄
ちくも三河紫麦の刈さ法ぞく



初白ハ白ちくる法ぞ紫麦の白。字義不丸
くるる。
さゝかぼきか泥かゝそむゝ蕪
蕪ハたむくふる赤焼を寄ぬ
初白はたゞれ蕪の字。酒宴の宴ふ音をゝ。
故事さのゞ紀りて呼紀ゝゝ。蕪ハ音蕪すて
物忌の事ゝ洗日の潔斎か。安事れ懐をいはし
めゝゝ。切紙ふるくるハ
遠帰ようあるそれハ塚の董うる

かゝる雜も空也の疲も喜の内
初句いくすぢ呂丸を悔るあゝ。遍歸の初雜
も字義のゆゝ。病ふかゝるゝ。其所より歸る
りのあるゝ。呂丸ハ歸らびゝ塚の下に住むゝ
ゆゝれゝ。董も住むの名ふゝけゝ。次ハ喜
中雲生の句ゝ。かゝ雜の乾りのゝ。をかゝ
空也上人を呼也。人の雲生を動ゝ。
乾雜空也の活りゆひ。ゝの活を限ゝ。
方言ゝ。



ごを燒ゝ多賦ゆゞる喜ゝ
物の名の雜やゝ古郷の風巾
三河の国ハ松ゝをごゝふゝ。次の句江戸
ゝゝ雜ゝ。伊勢ゝ爲雜ゝ。
類を以ゝをゝ。
麦刈ゝ稲ゝ名せる宮上川
名聞ゝゝゆゝ戻る喜ゝ
素面や蜂の巣法ゝ屋根のゝ
初ハ「いゝ」ゝ「氏月斗」の意欲也ゝ。

見せることあるハ。箱が裏ハいまゞき刈どゝ秀
あるゝぞうゝ。沢ハ一古(ひとこ)をくゝ夜うゝ月あり」成
元れるあるべし。終のハ一法(ほう)ゝゝと云れあゞ
めの淋しきハ思ふ法とふ彩れ玉あ」の伊な
らん。思ふ法とふ玉あを時の巣ふ法とせて
るハ。時の巣をて人のいとゝぬ淋しき場せきう
け。法ゝゝゝ見ゆる出面の景情を思ひたせるを。
本欲元の句。葉中ゆきゝあるも。を深淵ハ氏と
句の間ふありと見る。物語書ゝ元ゝるハ



猫の恋寵の岩より垂ひろう
唐きびや彩むの萩れ元ちゞひ
動句伊勢物語の文ふ流地とある成。今寵と
いひしハ古ゝの鉅範(きはん)なり。次ハ源氏物語
うゝ(ひと)燥(ひと)の巻れ文脈なり。源氏の君彩むの萩
のいね移ゝるを。空燥の君ふ元遠ゝなひしを
ゝれゝ。氏句猫出ふ田家とゆゝ。箱田家ゝやど
を物ふ彩ゝ出ゝ。その帰里に汚ハしき彩む
の方ゝを見ゝれ吟なるべし。故実ふゝれるハ。

一ゑのもこゝにさしぬ菊の水　うる
　酒命薄や油のやうなる酒の井
初句の詠なしの花蘂が長男れいをいる。ゆ
家集に影ふ效とて[illegible]かきけり。この長男は
と答書なりしをいつる句なり。次八日道上人河
傳尾へ贈書ふ。新麦一斗油のやうなる酒の井
南無妙法蓮花経と回向いたしゆるふ振れ
るなるべし。後ふ云ふ
　大と猿世の中より迷酒の年



　新ふ刎ふ刎ふ刎ふ刎し芸葉凡
初句八酒の年を祝しるるなり。次八子道年
茅屋と猿世ゆゝ。家ふ刎ふれ句ゝ。凡乃
句ふあゝ。凡ふ刎ふ刎ふ能く刎るふ用ふる法
なるを。今初ど遠ひゝる体裁なり。句ふゝ
ゝ家ふ行ひの公界なゝ。ふ道年
戒めゝるなり。茅ふ世ゝる楊柳観音ふ賛も。佛
を花を捨をほどけゝるふのふ立置て。それを移ど
遠ひゝるゝ。今の句と同体裁なり。それを新

しき体裁ハいとゝなぐさ紀ものなり。秋のみちぐ
ゝ伝禁ハ続けふおもゝくぶふ。りゝ新しき撰け
を極さゝゝ。ハ閑夜ふこゞゝを拾ひしゝごと
れりくと示せるとぞ。今翁ゝ集をもるふ。ゝ
しゝと覚ゆる体裁七八箇ふ及ぶ。られ実ふ常ハ
ゝ。沈年ゝ紀ハ白れ寂なり。

うゝ我をさひしがらせよかんこゝ
かんこゝハ閑居ゝ。隠者の趣を序とハ。今
翁ゝ紀とする紀ハ世の交をなり。楽とする紀



ゝ幽玄ゝ。すゝ今紀へるさびしゝなり。
也ふ俳玄のゝる紀。集中ニ四分ハ実情より
紀れふ。紀れをゝるゝ幽玄体ゝ。られ翁ゝ
性質のゝ紀。沈年一家をなハ基本なり。翁ゝ
ふ武人の渇ふ。桃青みぶをふ正風といふ名をいひ
ゝ。幽玄体をゝふ。ゝ。郊をいふハの正
風紀彩年なせり。ゝるハ俳調ゝをか
ゝゝを正風とゝべさなり」とゝ。沈流すゝ
ゝ古今集俳諧ふりをづゝる。俳一字の穿

聲よく。諧と引合せ大道ふかるべし。滑稽べ
の本意とする所なれば。是をいふ字義なりを
形遠なる事也。たゞめ平無しを要るべ
ゆし。論者を

義を過てのけぞり行のしるべ　中納言定家卿
心底を探よさしたる扇う形　大納言為世卿
小田原やなりひのもとに刈あふせ　大閤秀吉公
橋の長ふせられぬ秋の　宗牧法師
宗祇うなりやさやぐら鎌尾つぞく　近衛殿



これらの句をぞ正風とするなるべん。これ歌連歌
の作無ぞすなはち俳諧歌の始なり。又ある論
者のいはく。概書は世ふ毒を流し云。といふ
も云用ひゆゞこと多くなり」と爪ちぢき。疑歌
裂ふる所詠をふりのを俳也ちぢめしと云。
世人は多ら鄙語を長く。或は小童男うかなるべ
の云禁ちる語を多くといやしきこと。式
二子は云の禁の道いと極りこと。世に此者
もまことさる事なるべ。これぞ論もさるいと迷は

○翁俳諧の中興なる事

初く事なるふ。初く行そぐるハ必たのふ而あ
るべき歟なり。

右聖ようく
きめて打く我ふ性せる情う書
郭公今ハ俳諧せるさ世この形
宕古窟こ入るのおど風吟を
牡丹風の分ハ竹齋ふ似くるふ
京都曲翠亭の俳諧ま所思



此道やゆく人なしふ秋のくれ
加賀ものしるを
人麥や出るかつる杜のうれ
出道こ出くこ源しや松乃月
人の貧意を制しく
白雪ハ淋しき味を高くな
初白ハ古ハ高くこ高うれなり」の秋ふ郷。
雪せよと形くるハ。和たのむ和のくびこと。
郭公の白麦ハ遠時美吟を吐くこ人なれをりく。

時雨の美麗を喻し。裏の公ハを知らしをるら
とする人多しを歎し。風の白を述
懷する。牡丹の墨字白眼なり。牡丹扁鵲も者
殺なりしを知ぬ病なり　みるみ〳〵ぬ
あるれなりなる
びく憔悴する白なり。雲霧ハたゝかさの風吹を
あるみて新しき迷ふ。行人等一の白ハ未開れ後
しき道となれるを。ゆく人を見てく喻し。裏
の公ハ浮世の易往無人なる法ふりこゞる。人
うる歎ふをいうなるべし。歌ふうとする幽玄



好む人なれを。寂莫なる書林をうけて歎〳〵
しを。人事なる〳〵の白ハ花も月も時を忘れて。
書林の天ハ催されし〳〵人〳〵。今ハ深情を事と
する道をうるとなり。松の月の白。表ハ友の行
路なり。裏の公ハ正風脫ハ世をひろまるる
を。松の月をうけて深〳〵いつるなり。正家乃
白沙類なる集中ハ事〳〵しる歌和幽玄と
名づけ侍きなり。されハ滴者の秘ぶる如く遊
玄ハ法られど必俳の義やるれ婚のれど。実ま本

話俗淡されば拙筆等世をわかしこを俳こと。人多
万端の本情を喩し。先と一家れ俳諧と宣めるる
ありり。可笑このことをすしせだ。たゆうハ絶
ふざれごと程云ふ為こ。いまゆる雲月ばかり
も成ぬべきを。ゆも承度の法　合命を蒙る。俳
壇林の英名興る。初ても程化の家の作興をと
つく一家の道となさんや。実ふ於こ始りく素
しきく慮り浮ふ一風を法る。これ翁が世ろく
○翁が成人の事

中興こるれいされ初ものも翁がひとくあり
を棄ぶるふ。其家ふ生こ武を守ぶ。之人を
師こくく独子ふ。ものこぶ。素門ふ倣こ戒をる
こせば。ようづを放下しく市中ふ居る。遊興紙
好むハ蓮好ふ行しく。深野紙探るハ為行を好ぶ。他
しくちのれが長をとうぶ人の短をせめぶ。

その心こを唐突しく秋の風

と吟じこ。ようこ。ようこ。雲をやる。風を慕ふ門生
多ある。俳格ふ従ふ事。七郎の集井今程初ふ

是れなり。初めて世を捨てまもなき人の交りを。賀茂の河の
分とりて難波を船出。淀川を漕ぎ渡りて井んぜ。月花はいとの招くに任せ。山水は佳境紙探
もとる筆を労せず

古畑や花の藤山の拾ひだき
初年や笠ぬぎて茶難を紀ぬ
世を藤年ちろ船かく小田は行廣
初二句拾ひ紀は境界の句なるべし。藤乃
句格はなはだ切実なり。されど世を藤やとは仮



廣きを今にと承るは境界の句とて乃
手示波なりされどなほ俳諧ふかく手示を波
をせむるにはあらじ信徒なほ仮る格なれば信徒
少なるかきりは少なるも。かくもあるべきかくいう書
いとなかねど欲連歌とは硯手懸紙寝ぬ歌
りの為なるの友なり

紙ゑるも霜や重うて拾ひ人
ちれるのたちひをいかなり

田中の本義寺ぬ

外のものゝ外稲所〳〵の時の事
なるかきりハかく記さきハ也しても他ゝ句ゝ
ハ稲かりし記事の所〳〵まあらしさを略りて
渝せるなりしに句一紙裁なり

○發句ハ必季節を用へき事

おに寄抵のやうなるに季節なく且歌ハ季
節のさたなき友なるゆへなり季節をまもる
を特かゝ人のり独逸とも他諸の發句ハ必季節ゆる
ゆきなりし特をかの名義の格手ゝ自ゞ紙〳〵の



友なり。さて友ハ季節形なき句ハ必さいうゝの義
なり。これ遠季の所を以て彼の事物を除也
べきゝ格なる友なり。滑稽ハ人と酒茶の名まて。
酒をそぎ〳〵やまず。利口なる者のけしゝ句
に拙いふ云たる名まれて。夏小路さく句を吐く
ゝ。始ゝ意ぞをりく發句といふなり。百
顔なと續くる。老の發句を打ふハ後世の
沙法なり。されハ滑稽とふ名ハ。狂俳を義とすれ
ゝ。所興ともゝ。ものゝ眼のゆゝを記事

節の句をとらへて物を喩へその働きをあらはす。
でう俳士の名ふ居〳〵んや名所の句なども季節
なきもゆるすべしといふ説ハ年竟をいふなるべ乃
元ふ〳〵きゞ夜〳〵。俳句〳〵なども季節なきハ

○切字の事

二の町の句とゝまべきなり。さて又さ紀なる業
麦の句切字と指づき物なり。或人〳〵ふ。發句ハ
切字ゆるべき法ハいまくいふも切放ハ有無紀
なり。能牛切字なりも放そ他者の手際とすべきも



のなり〳〵。まづ切字を猶せんふ。發句ハ切字を
ゆるべきなれど。法とのつゞむつゝ。法ハ必法乃
義あるべん。末の世ふ人のもゝ所りて定めるる例
格などのたゞひふあるべ。天地自然ゆもちなり
ふ立門物紙法といふとゝ。聖人のいまゆる事第
太位すふ〳〵ら見なり。なりふ法の法〳〵。
たとゝ〳〵ゝ大道の家紙建るふゆらかゞもこと紀づ
ら紙なり〳〵。材木に漆をゝがちこれを其地と
すゝ面〳〵。そのみぞふ為を落〳〵試む。低きゝハ

必ずあつまれるもの。その去りゆくるはのみづ。あちらもまた平均なるべしられを法といふ。家を建り。故に法の字ハ氵に乏ひ去ふ乏ふとぞ。見をあらはしたりふ。のりの法ハあちらもまたふ立のあるべきの家の聘居低くれたゆく人あるかどあらりあれども。あちらふ效ふてならふ法なり。今切字ハ法なりなるべけれ物とせば實ふ切字のきも白岩はらうに強えるもあれど。なるべ叶ちぬものとハ定めがたし。抑ふ切字ハ法といふべ。



きたるべく同じ。切字ハ用ふるといふ。切字てふ体ハ物ふ於ては必その用ハ爲紀なり。筆てふ体ハ物かく用ふるがゆく。若用なくバ筆てふ体ハなきもの。されバ切字もその用を明るべく用ふべきなり。まこと白の姿ふよりて。切字有りとも安きとも定めがたし。一疫の病手於て。多分ふ住せといふ病も是來海。ふ於て。ひとりふ。これも切迫といふ者ようあるべきなり。然ふ親白深白といふ者ありて。切字ハ

沙法師。紀白ハ首より御まぐ。紀白の間
おとゝぎの声〳〵續きたるをいふ。蘇白ハ紀白
の間を繁の縁の斷るをいふ。紀白ハ宮部に
の欲す

おぬ人をまつ門わの浦の夕浮寸
嬬や藻潟乃。分もとられ彩く

蘇白ハ殷富門院の欲す

なのふいとふ。よもあづ長。さたをやハ。
うぶすたゝる命なる爲き



一ハ續き〇ハ斷まる。斷ハまるのち切なり。欲
も續きを重んじ。連欲の教白ハ切を重んず
るなり。おりふし欲す切字の沙法なきハ。元来ハ
白りのみくたけ言きが故なり。連欲も欲す
教を阿仏尼の教白れぬく

ふハ花や林のうぐひすに放るゝ
ふハ山ぶの雪のちるあふ放にゝ
かくのごとくいひくづをはるもの
をむべきなれど。元来ハ七八二句りのなれど。白

だけみじかくて平句と変ずるのけぢめなり。
されば百韻も漸くくる変端の句なれば。いうまも
たけなるべくなり。たけなるくせんなり。
一節の物をとりてふたくふなり。その物をも
七八二句の一句〳〵の定言の割。或八句毎の末を字
ゝくこゝめや哉下和字等。世ふいふ十八切字
なる句ハ留〳〵あげく必たけなるくなるなり。

糸なるで清ふや。清ふ柳陰　宗祇
袖添し。扶ち西風。夕月秋　肖柏



常ゝかるたふ夢のあやたる　宗祇
むハ初ゝ。柳ち髪を。時津風　宗砌
素さらぬ初ゝ。こゝろれふゝ学　兼載

初句糸なるで清ぶや清ふ一語。柳陰一語なり。
其次ハ袖添し一語。扶ハ西風一語。夕月秋一語
なり。才之常ゝ一語。かるたふ夢のあやたる
一語なり。才四花ハ級一語。柳ハ髪を。学死つ風
一語なり。清ふハ素さらぬ初ゝ一語。公のふゝこ
学一語なり。おの〳〵の不語の割ゝて分ける

切迫なりされど切といふ名目ハ此彫ようでおこ
れるなり〇点の所を切と宣ふ
ゆるまるいたれあり〇て俳諧〇〇ハ

郭公△正月ハ梅の花ざかり
木曽の橋△雪ゆるや。せぬく春の雪
萩の葉△うや。秋風のはつし
破蕉ハ日日新や。よるる△夕涼
松茸や。〇〇ぬ本紫式部ざかり
菖蒲葉△彫の翻の翻



迫△点〇〇俳の彫
字義の体格〇。あち〇〇〇〇〇〇
〇〇。俳〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
十八切字ハ限ふ〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
古人曰十七字ハ〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
も押〇〇彫〇〇。俳〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
を切〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
迫彼〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

耳うとくふぐ唱へあぐるふ於て抽子は唱のみ
なるが友なり。故ふ句の格稍ふ変りて。抽子は
諧を以て所みなくなり。俳諧の初迷ハ格の自拙よ
りなれど。義理を於て動のしべきふのしびを迷
切迷る所が句の眼目なるこの友なり。大凡格式
とくく低ぶを用ひ。ぞくく切ハのちくなり
に侍るものと知べし。今六句の切ハ格より出る
証を示さんかたどめ郭公の句を。世所正月を梅
のもとと面白ふ見し所をなげく。今の郭公乃英



雪を喻しくくを先とす。本首の情ハ本首の人情の自然
雪を生ぬく菓の強きをとりく。本首人の情乃
雪雪を喻しくくなり。萩の声の句ハ不可聞
の秋風をとりく。萩の葉の侍きを喩せりらこと
のこ句ハ。字面の格よりく。初ハ文字の一語級突
ちをしくちきこ。二三の一語りく其本情を喩し。
多ふ変波の字なくくしく。句云ふの友。世所級
句の侍ることいふなり。ア初係の句ハ格ふ弱き
友連欲の強ふ近く。句云句ちくいふ紀よりかくしび。

松茸の句きゝぬ本家うくたの産所を繁し。
深山を見ぬく拾ふく威ゆ。ゆやめの句ハ句
門竈の祝ゆの正月鶴ゆく呼起せり。きやゝ迄
るくまゆるくふまゆ死を出せ星移り物うつる
安者迅速を動めく。世のきゆの死を悟しむ。
かゝる俳諧ふゆくゆ。世西俗をなし。人紙
響らしむるパられ箱ゞ湯ゆらくの切ハみな
格の自拙ふゆるゆゆ。ゆんくいくゞも此格ゞ
ふ言ゆるゆくゞ△点の和切ゆる事ゆゆゆるべられ



ゞ。唱くあぐる拍子ふ於ゆも其心ゆ為べきく。
拙るふまくく○点の和を切とするハ大まゆ一等の
句に於くゆ他者の俳諧ふ置ける拍子字（きやゝこゝの類）
あゆを。後生の人紙の意ゆもゆく切ゆくとかりふ
ゆゝと僻事（ひがごと）と宣むべきく。さてかく宣ゆ宣く
まくく打まくのせくいたゞ。切ハゆと拍子一倍の用
ゆれゞ。格正きゞうく俳諧のきくびゆくゞ。
○点の和紙拍子ふ唱上んも害ハゆくゞ。ゆゆ
今△○去点をゆくハしおく。されゞ箱う二十八条

ちゝ書るも。切字ハ一句の骨柏ありとゆるとぞ。大
まつ〳〵等とハ紫麦の句すべりち芝ありゝ。ふ
れ柳の句ハ杜若と貫ん料ハ。首ハ三河とかき。
杜若より紫の字を中の句〳〵引世しゝ。彩の
如くこゝも三河と柏ゝの為平宴放しかゝ紀。
宮を中ハ叔むるを。惣てきれといふ。兎ハもかく
も柏ゝの紀で字ぐるしき。すべて柏ふうもく
平句めさたるハいふもけしゝなり。後世ハかるる句
をそのて興ものゝ。切ハ自然ハ出く。その自然ハ



出くる物をくよりゝ名付て切と唱くるハ
つのぶるゞ為くだたくバ深文の助字といふも元
くる実字なるをのち世ハ助字と名付るゞ
○二段切三段切の事
如し。まゝ二段切三段切も柏ゝるこそさいあれ
只一切なるものゝ
乙州が餞別
梅若なゝ海ゝこの宿のこゝろ〳〵汁
くれゝゝく汁の句なり。時節ハ貴殿ゝる梅若

菓をのぞく客物を喩しるるなり。はつ月は
一日ふいひ延べる白なりとせど。一白云公面若
とあるべし。白云八今日のはつ月なり。何の味
うかべんこん。君がゆくさきはよ梅ふるふ白ひとな
らぶる。こうく汁あり。接拔きるるの。猶云ふ
くはうるれど。只一ッ物の白なり。眼ふ書祭
山おろぎ。松魚。はつ月も二度切なりと
賞誉れ客の道ど。二物の珍しきなり。初乃
字無しるる松魚の白なり。若ふ二客の一ッ



切なり。さればもいつぐ切ハ物を一個の用なれば。
二ッ三ッかりとて法文賞をべきふものなり。
嫌ふべきいれもなるとあべし。又二度ふれハ
夕魚や杉ちいろの孤うれ
初杉や雲くるの切屋は
松魚のあふ時切のようを
夕魚の白二季入の巡なり。一説ふ二季入の巡の白。
必二度ふ切ぶ法といつて。先もいうるなるの
古語ふも道者以一立とふなり。これ菓ちく物

かく一道を行くこと。況や要をる一道を行くこと行といふまでもなく。たとへ二季入こむ句こそ。詮をる所の義を一成ふ極まる道理なるべし。

二度の切字を用ゐる所あり。夕顔の句の文字のやハ。秋なれこそ彼や志賀。あふみの山や筑の山ぶのゝ。夕顔を呼出しこそ。句宮も夕顔といふ物ハ。夏ハ同じさかりのむなれど。秋をいろ〳〵ふかるナア「瓢ふ」とこそ。べきなり。抱ふハ二ッなれど。句のこゝろとなる歎ハ一ッなり。初秋の句二季にまたがる切ハ一ッなれども。句宮ハ〳〵なり。況





れば二ッ切の用ぞや。さるまでも法なり。

といたぶ。これ法の宮ふ落んゝ。秋夏の句色も二季にまたがる切ハ更ふなけれども。句宮ふ害なり。法を崇ふ者実ふ彼〳〵大体を知べきなり。

端出みよりいひ流し〳〵切を持るのハ。

湖水眺望

幸徒の松を花より脱まく

此句落る人ハなり。或ハ刷てハ哉ふ通ふ方どいふる

白雪を切字なきこゝろみるやめる法なり。哉と留てよき句なるべし。箱根の石垣ゆりて哉と留ざるこゝろ。哉とせずして只松一方の書類となるが故なり。さらに端也ゆりて数体うゝれる句なれどやはり哉留にて留るべし。哉の字の迷ひ。幸湯の松は花より紫なりといふ句なり。絵にかゝる書ゆる句なれども出を俳諧ふまる格なり。句意は出羽郷の書色を近うけるなるべし。さらにかなり。さて幸



湯の松をむよりも紫ふゝしくといひ紫しゝ。此哉の流しにて強人の出を端也の句あるよて引出しゝなり。花は長等山ふ名ゆりて出所ふあづかるねど。尚季の書ふ入て名誉の松一株ふ句をせ。松の種ふ紫をゆるせるゝ彼の書態を思をせるゝ。ゆるも絶妙の句。洗練妙なる哉の流しより出るなり。然に哉ゆるゝ端也ゆるゝ

比良之上梅てゆけ度せ書九書

はしもの端出しゆつるゝ物こそいとをしけれ。
うゐの紀範なり。まこと手水使ふ合ある切る
景清も花見の庭まゐ七兵衛
粽ゆふ所手ふ技む頭　髪
られ景清を民法なる君ゝ。七兵衛を通俗
の君ま稱ゆ。ゆはの手水使ふ引ゆゝ。花乃髪
なるをさゝゝゝり。粽の白ハ文ふ平白くまゝ
端書ゆるも働うずゝゝ平白なるハ。
白木亭



妹乃羽の歳ゝひ鉞る堰の中
田荘の酒屋
相乃木ふ鶏なゝなる堰の門
故立のの茅ゝて
さゝゝのゆりひ出ひさゝゝ
ぢゝ拍子なゝ搭なゝいひ流しのゝれ白ハ。
必端出ふゝゝ収まる例なるふ。世初二白を
義なきハ清兵衛ゝ端ゝ村のゝ。
白ハ出義となれるのなり。試ふ妹の中九白城

「袴よりく紙ぬ」とく桐の中の白を「熟もをう」
あど格紙収めらんふい。燭せたもたよりゆ〻んを。
江の白梅も彩紫もを燭を附るく。横ゆも
張〻ぬどを。格あるふく燭書みも収まる使
とをれを。初二句おそく〻ハ字絵ゆ〻んの。まく
格よく調ひを燭を附ふ付ひるも。集とある
ふ於てハを〻を用ふべきのあり。

蓁海の浪酒くを〻ふの白
名月や面は深川酒うも〻



初句のあ文字深川とあるべきを。箱根は深川
の住なる故正面を客の義平俗くを客絵
者こたるべし。これをを燭を附といふ。雅道
も蓁海ゆく〻ハ月にをれもをれを。後の為
よハ燭せゆるべきなり。次の白ハ深川と指を。
流石繁花の地も。名月夜粋人の落きとハをう

○放といふ事

るをなり。さてさ紀平を引洗せる白平の放とハ。
切の銘は類しく。洗文俳句を仮るの手除なり。

これりろ〳〵物を喩へふ於て。を物ふ似たる
げる案外の景を寄せ合せて喩へをいふく。
草をう門蔭の如く。雖〳〵人をてのちなな
ほふを塵を云ふ類うたむるふ於て。似たり
るふりて喩へを。をきめらみあげて。き
くくいたぶりて感投せば。案外なるふりて喩
せを。きく人ぞかと感投をこれを蔭んみむ
かし画人のりく一容来ほて絵をもふをふ
変ハ墨絵の香なり。画人たりくらく必爲なん。



これを問ふ年響なり。さて画人をるに更ふ
御者し。一路も筆紙くぐさたちぎふ爲と家
さて友なり。画せらふ一御をきりけ。紙をのぐて
四隅より墨くりりて。中ふ及んぐ絵きわど
淡し〳〵れば。響ふあちたりふ出来ふ。ふく
墨を彩うを迷ひ。墨と紙とのをたるれて響
いりり白し。さればたいうの放まても色ふ響し
きなり。紙なりりる色の白のかき。墨と首と
をりく病と尻をを喩へ。墨衣首尾なほ乱

ゆゑ。うの墨うを紀淵のぬく敢の深みぶし。
法師の猫の物きハ葉ふうく。よ紀敢といふべ
きなり。されどもくのゆゑ敢みぬぎ。更ふぬめ
ぬるもぬるハ緣侯のゆゑく社ゑくいたん序ふきつ之河
却くふくもづし。道理の少えぬゆとなるなり。
又ゆくく格よぬめうるとひ孫り思さバ。理屈向とな
らん道理屈とぬるうるの習ふ於くいつ道うよ
くいたんふ。さくくハ端さづくくうる方ふうくゆ
ゆくくさるべし。



さみぶれや能猫ゆげる書を家
年くや猫ゆきせる猫の面
元軌や狩くだ淋くく秋の蓄
白けしや時面の花の咲つくむ
月ふき師光ハ子孫ゲ蓬宮
初白ハ彩るくゆげくる書をげくうくゆ。
就宮世界の物くふなく。也面北ふ降蓬
くく昭のうぎう潮くくうる。猫の白
ゆ元軌逝猫の白ふる。春節の元軌ふくさづ

しかれども。年々の累字改まれ句くるなり
明なり。西とハ我良なく。猿ハ生なかちの仁猿く。
句のあつかハ身の乞るふきざひ。論貪（へうらひむさぼり）のこゝろ
多きを歎しきるなり。牙ニなる元紀の句ぞ。
いま發甚ふむうひ。よろづりの雑ひよろ出来
さを喩さんとて。本族の杯を呼出しきるく。
おりくだの舞。おりくだくとしく盛きなりも。
莎子句ハ句の字句眼なり。句れあつかハ咲おきり
とく行の甲髪やハなる。ばふ老ぐれの西を採く

せし花の色なれどもなり。終りハ翁が森見
のゆく。月ゆきハ森見の呼出し師尭ハ千路
の呼出しまく。句のあつかハ月寒く凛（りん）くる
あのつきゝ席を。かの仝華れ縦（しきね）りく喩しきり。
されども月蜀れ龍猿。累旦の仁猿。妻光乃
蓍林。莎子の附面老の森見の子孫。いづ迷ゐ
皆人のおひふ產し。これを叙とのふ。されども
新くかけ叙れくぬかりなきも。句意の明なる
を体格の服するが盛く。

思案するに冥途も彩や林の蔭
月雲月の水を掬すやうに伝ひ
いさましの月さうやせ沙弥きく
初白ハ茶の限元祝の白ふくべく放はるてり。
月花の白ハ。雲る稀なる花を伝ふと雲
君まれだ。変ふ稀なるあり〳〵愉せり。られ白
苏子れ白ふくべく一等新〳〵き方ま〳〵ん。
涉蔦の白。対雲〳〵新ふをし。ふれだ放るべ。
対ふ蔦ん。新はをう〳〵ぶるハられまいられまり。



地ニ体より粉弱くゆくりの。連歌の姿となるも
あ〳〵ん。今我樗の白れ固ふさみぐれのゆ〳〵ましし
とゆげ〳〵られを示ハ
日の道や葵うるむ〳〵ゆ月白
さみぐれや桐の籠られる秋の書
さ〳〵ぐれる鶏の抑みぐ〳〵鶏ふう
さみぐれや蚕ふ〳〵ふ桑乃畠
さ〳〵ぐれや巻柏の緑いつまぐも
さ〳〵だ迄も後の月の小夜う新

さみだれ千江物をや月の新
ふる雪や年もすうなる梅の白
さみだれハ流ふり埋むうなかさ
十六夜ハ雲ハ月うふ雲れ
この十一句のうち其人の作とも覚えず。甲乙
○連句俳句差別の事
あるハ世世中の変遷なるべし。能中絶なる
二句ハ俳諧より連歌ふあるべし。あやふ
のうたかる作ハ集中只此二句ばかりなれ



此二句をいうふあるべき事も初り難く。連歌
ふのうざるの事も初り難し。おのゝ体裁ふ於て
定れる体あり。これを以ても初てもの作を作るべ
俳諧と称ひ来るの屈々迷だ今要しく沙汰を
べきなれどこれ書易の事なれ為ぞ只一渡り
いたす。俳諧の句ハさまざまれの陪るさまハ更ふ
いたず。只就特のべざるべ平のべさみだれ迄乃
ものの陪を喩し。蓼のかゝむくふ日の御紙
初るといふ。一天の加さ雲ふるを示し。桐

の篇これるといふ斗まつく。落漬きて物の打る
を思たせ。鶉の御みじかくとんぬるみつく。沼あの
塔りうるを喩を仕方なりうる俗ふりかこと
つけなり。連歌の句ハ。流こうかさあどく面一通を
つくいひ下ひなり。俳はつく水こうづくといふを。
こうかさたつくあどく。雅言りくことづけなり。一
篇ふいふハ連歌なりうまこ伝るべきハ連歌乃句
能く雅言りく仕立こうもこを格たいなりこ
俳句こなり俳句よく俗語りく仕立こうも。一篇

のいひ下しなれば連歌なりこ知べし。猶こを記
世ハ歌連歌のみやびこを伝をうこいやこを示を波を
乳し。或を理紙破りく理紙ゆこを波をこを。こを上ふ

○隠士三句を解く事

なりもゆくこそ。隠士一男来こかこる。月波一
隠士ふ遇こを。その後をいりふ及ぶこれ宿義の
捨紙ゆく苦こふ隠士意せび隠士が句を宿く
だすなりもこ句を時きこれ方今れ調なりこふ
これこを句こを思せび。俗く蕉翁が句をゆげく

名義の稽古論ゝ陶士ゞいたゞくゝりゝ格式を
見れだゝる格のゝ。地をおそる若の眼よゝ云
物ゝる地と見ゆゝるゞ如し。ゝれゝりふ地のゝゝ
必ゝる事ゝり。西ゝ格を排ひ。蕉翁ゞ句ゝを
をゝるゝふ。濛ゝゝゝゝ只閑称ふ句ふゞ如し。即句
蕉翁ゞ集を按ゝ飛ゝゝゝ。陶士ゝ羅ゝ所
全ゝ道理なれよハゝゝ。句宗味なゝ或ゝ
説云ゝなるゝの十ゞ八九なゝり。俗ゝ拙ゝふ
化日閑ゝ蕉翁ゞ句の解書たゝゝを陶士ゞ



説ふ彷彿ゝれだ。俳諧ハかゝる所謂のゝの名。三句
は金せごゝるも見ゞ西の枝に雨なゝん。又陶士み
説ゝゝふ形ゝハゝゝゞ宿癖を被ゝ。三句の意ま
通ぜゝ。先ゝ陶士ゞいたゝ格式ゝゝゝれだ必
理よゝかり。かの三句のゝきハ理ふ離れゝるのゝ。
海ゝ理ふふゞれゝり。三句の貴をけんとなゝバ
理を説ゝ屋ゝゝゝふゝれなゝゝらく理ふ離る
の戒も必ゝるゝゝり。すなゝち理説ゝ句を
をゝるふ形濛ゝゝり。俗ゝ拙ゝふ理ハ物の解ゝ

格ハ変の体こゝにふ離る歟こゝぞるのあるを
假令離るゝ元必その分ゆゝん。或日詩歌連乃
三十ふ変ふゝ変ふ上来の旨をとらふこせうのこ
旨をこ復吟ゝ絶ふ言をあこびかゝ紀年
これを変ゝ初ゝらゝ世ふ加この説といふ事
ゆり。加こゝハ古人の説ゆるこふ又説き加ふを
いふ。先達既ふ加こゝ又解きのぼせかけを。其
末ふ生出ゝ人今ハ解登せん年説ゝ。こを
ゝゝ聚ゝらん旨若ゝゝれバ。寰ふ一変説



をはゝ。その吐ゝ変必ゝ多ハ名利
ゆり。これを虚假の加こといふあり。初ん或ハ
色鄙のこゝがゝ。其笑偽ゝ知ら紙ゝれバ大ゝこ
ハ説者の出性ゆゝふそ。その対搆ゝ。ゆもあり。こ式
説こそいゝゆる幽玄の極こ理ゆれ理ゆゝあ
とにゆひ入ゝ。心言ぶゝゝ説ゝゆやあ紀境
る入りの多ゝ。かゝる変説の臨觸を有る年

○發句の説といふ

其角ゞかける猿蓑集の序文より起るある

爲〻こゝ序ふいたゝく

俳諧の集俗るゝ事古今ふつゝく此道乃
たゝ〻起もべき時なれや。幻術(げんじゅつ)の業一として
其句ふ魂の入ざるハ夢ふ夢見るたゝるゝ
べ〻こゝ。彼西上人胥まゝ人を俗を云〻。
俳諧ふ魂の入〻こんふ〻そとゝ〻新月
仰の比。伊賀越しゝる山中まゝ。猿年小
簑をきゝせゝ俳諧ふ魂を入給ひ給れバたゝち
まち影猶のたゝりひを呼びきんゞに懸る



爲きゝ幻術なり
初志ぐれ猿も小簑をほしげなり
たゝふる世序又ハ猿簑集紙ゆめるゝ記其角ゞ
一時の程云なるを。ふ沼なきゝ業ハ世道を伝ずる
のあまりにまゝとゆる事とゝりひ。まゝ
古池や蛙飛こむ水の音
世句ふハ悟道の証をとゝける書なとゆるふなづむ
なゝん。伊賀越のもハ只時面れ教句なり。句云
ハ猿の きゝげようづくまりゝを以ゝ山路の時

面れ隠しきを喩しうる句なり。世或人乃
説は古歌はいとゞ〻云魂（こんぱく）ばかりといふ。此説おし
なべて〻は清らられ神どを宮を崇せるふ。伊勢
物語ふ紀の有常はまゝかゝしと紀業平は
敦忠よりも衣服をかくり清いやうに。有常
よれやは天の羽衣むへしこそ
君のみけしとなりうる迄
此歌のこゝ清はいられ天の羽衣なり。此法あるる
清才なれだこそ。かゝる御百料とも人の寄り



れとよみこ。さてこそ羽衣を此方へ寄せるる
ものと〻示しといふべきを言ふ示ふのこゝ歌
あり。此云ふ示ふこゝ歌せる物を云魂と名づけるる
べし。翁が句ゝ〻いたで。

初雪や幸ひ庵子一花生

此句翁久しうして学庵の名を遇うと場書
あり。句の表は一筋ふいひこゝ〻るのこゝし
こゝろは場ふあり。幸ひ庵ふ花生」人〻来れ
よ共は重見せんといふべきを句ふ示ふこゝ

なるべんぞ。これ歌の云魂を教へてくいつのこなり。
なほ〳〵廣めてくいたべ。歌教の為に沿る事を
もつぱらべ。人〳〵和歌の作法も必云魂を為べき
なり。今世時面の白ふ強く魂をいたべ。山路乃
時面ハいうなるものと問へる人ハ言く。猿も小
義と侮〳〵げるもこいふを。さく〳〵人さて〳〵言く
作〳〵き物と合点せ。合点するをハ邪なる白
の魂なり。されバ世魂なる物を裏せんとて。字
義の格より切世生し。切迫のもれ遠ハ変

より魂世生せるもふハ去るものく。世手ち
世猿の小義いとをかしく。且寂なりとも
感情あるものなれど。其角も俳を幻術と貴し。
世序の荘義とハ去るものなるべん。古池の句も亦
能里池ハりとより蛙なるもの夜澤人も好く詠
物とも。芭蕉古の字を添く例の寂をつけら。
世池芭蕉の物ハ去るのゝ強波り手き打
捨りのなれバ蕉芦せひふさがりくそれも見て
ざるふ蛙とぶ去言ゆく。さて池よと初〳〵迷

〜とをり。惣の句みな〜しべ。古池の句をり。蛙の字は何とも〜覚束なき所は風情あるべき。悟りを解の花。此句を借用ふるゆゑ見べれど。是もたゞ一旦の志わざ。此句中は悟りの有るゆゑ〜しべ。芭蕉も禅味は甚だ〜るべきなれど。いまだ〜悟りを切るといふ名をさうべ。

猿蓑に春〜夢は枯野をかけめぐる

と吟じ侍るは俳をもて〜果てるべき。西行の初心の案。此句の格は俳〜さるゆゑ学ぶ道。



悟道は生を殺して生を獲るの道なるべき。易〜はゞ〜学びゞ〜学びゞ〜死を空理なるゞ板なり。元を物学ひは法ふ依る〜学ぶべきなり。むしの句潮といふ所の海は鯉といふ大魚ゆゑ人を為やまず。韓文公といふ法若其粉主るを知る。文を作りかの海ふ志づめられて。鰐その海は感じて西へ去。そ後百事ようゝ鰐又出て漁人を為やまず。時の

那珂郡漁人等ふ命じ網を作らしめ、かの鱸をとらんとす。時の人世二郡主の切を論じていはく。文を作るに鱸を長とす。其人の流の殺すべきなり。流ハ虚象なり。学び難きを学び難きを世ふ作る難し。網を作るハ法の依るべきなり。人ふ作ふるふ易し。世法こそ密なれといひしとぞ。今俳諧の体格ハ世なりち法なり。世法こそ依るべき学ぶべきなり。その通否ハ幸ひふ和ゞ者自の法とすべきなり。さて格の類ハ多く



学ふ要しとふるゞ如し。格の類ハ多き。季節の定めゞ記。体裁の依るべきそのこと法一切四条ふ別ち各二十句をあげて要を附す。格を生ずるものハ世格なり。押韻和べし。その四条ハ一ふ巻頭二ふ境界ふ端出四ふ名所の句なり。